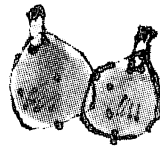


加藤辨三郎 述

# 歎異抄

14

文責 本誌編集部



耳の底に残って

第五章に移ります。

親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念佛まうしたること、いまださふらははず。そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり。わがちからにてはげむ善にてもさふらはばこそ、念佛を

廻向して父母をもたすけさふらはめ。たゞ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦しづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと、云々。

この章も、現代のわれわれから見ると、わかりにくい点もあるようです。

父母というのはブモと読ましてあるが、昔はブモと読むのが一般であったようです。それから孝養は、このごろ

コウヨウと読むのが普通であります。「歎異抄」の書かれたころの孝養は、みな追善供養のことで、法事を丁寧にする意味になるわけです。一般的にそれは相当盛んに行われていたと思うのです。それにもかかわらず、親鸞聖人は、「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念佛まうしたること、いまださふらはず」と大変厳しいお言葉で仰せになっていきます。

親鸞聖人が、なぜこのようにおっしゃったか。これは私の想像ですが、当時、一般に葬式とか法事が入念に、いうならば相当に派手に行われていた様子です。そして、本願を信ずるとか、念佛を称えるとかは、二の次で、どういう葬式をするか、どういう法事をするかと、世間体も考え、できるだけ目立ち、世間さまの眼によくやるなど印象づける風習があったのでしょうか。それは覚如上人の「改邪鈔」から推察できるのです。覚如上人は親鸞聖人の曾孫に当たります。そして今日の本願寺の基礎をおつくりになった方です。「改邪鈔」は読んで字のごとく、邪まなことを改める、つまり、それは間違いだ、そういう間違いをいったり、行われては困る、今後は一切そのようなことは止めてほしいと、二十カ条にわたって書かれているのです。そのなか

に、報恩講とか、葬式とか、人の集まった場合、信心の沙汰をする者がほとんどいなくなった。信心の沙汰をよそに、葬式がどうの、法事がどうのとはかりいつている。これはとんでもない間違いである。わが祖師親鸞聖人は、いまだかつて葬式や法事をどうこうとおっしゃったことはありません。そればかりか、親鸞聖人は、自分が亡くなったら、自分の遺体は加茂川へ流し、魚の餌にでもしてくれ、葬式などは要らないと仰せになっているとあるのです。魚の餌になると仰せになったことは、非常に印象的な驚くべき事柄です。

「歎異抄」に追善供養のことが載っているのは、多分お弟子の一人に、親鸞聖人は、私は親の追善供養のために念佛を称えたことなど一遍もないと仰せになったのでしよう。念佛は、そういう意味のものではないのだと、はっきり教えたかったのであるうと思います。そして、私は勝手に乱暴なことをいうわけではない、そのゆえはこうであると理由をはっきりお示しになられた。これが唯円にとっては恐らく印象深い教えであったと思います。ですから耳の底に残って、聖人がお亡くなりになって何十年たっても、その言葉をまざまざと思い出して「歎異抄」に書かれたのでしよう。

## ともに救われる道

なぜそうかというところへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。」と仰せになっています。これは佛教の根本思想です。

一般には、父母といえは必ず自分の生みの父母を思うのが普通です。親鸞聖人も人の子であります。とうぜんご自分の亡きご両親のことは、常に思い出し懐しく思っていましたでしょう。それはご和讃にも、恩愛の情はなかなか消えるものではないと書いていられます。ですから、われわれが常識でいうところの亡き父母に対する恩愛、あるいは子供に対する愛情、これはちよつとやそつとで消えるものではないというご自覚は十分にあつたと思うのです。むしろその自覚が非常に強かつたのでありましょう。

しかし、よく考えてみると、父母の恩愛などに溺れているのは、如来の仰せの真意にそぐわないのではなからうか。なぜならば、如来は生きとし生けるものすべてを救わなくてはやまない。こう本願を立てて、お誓いあそばさされているのです。それゆえ、親鸞の父だ、親鸞の母だと、特定の人物を目当てに仰せになっているはずはない。そこに親鸞

は一種の矛盾のようなものをお感じになっていたのではありませんか。だが恩愛の情に対する自覚が強ければ強いほど、一切衆生はみな世々生々の父母兄弟だという根本の道理を感じられ、深い如来の大慈悲心がいただけるのです。だから自分が救われるということは、すなわち他の一切衆生が救われることでなければなりません。他の衆生が一切救われればこそ、この親鸞も救われる。親鸞の父母も救われるのだ。みんな平等に救われていく。そこでこんなありがたいことがあるうかと感じるのです。

ですから、親鸞聖人は、自分は自分の父母をあげて、どうぞわが亡き父母に冥福がありますようにと、そういう意味で念佛を称えたことは、ただの一回もない。自分の称える念佛は本願の仰せなのだから、それをかしこみかしくみもうして念佛を称える。そして自分が救われるということ、自分自身で確信したとき、すなわち法が真実であると確信できるのです。本願もそれによって成就いたします。自分が本願を信じ念佛もうして救われることこそ、本願の成就を願うことであります。こういうお気持ちだったのでありませんか。

それでは、なぜ私自身が、自分の先祖代々に灯明をあげ

て追善するか。私はそれを通じて、一切衆生が救われていく道を深々と信じさせていただくのです。阿弥陀如来は、法身にましますから、目にも見えず、言葉にもできないみ佛なのです。ですから目に写る対象がありません。そこで木造の佛像を前に置いて拝みます。その佛像を通して、向こうの法身法性の阿弥陀佛を礼拝しているのです。

しかし、目にも見えず、言葉にもできないみ佛ゆえ、佛像がない方が本当だとか、佛像はいらぬということになるのでしよう。だが、それこそこちらのはからいで、そういう考えは素直だとは思えません。私たちは、もちろんふだんから、電車のなかだろうが、家のなかだろうが、お互いに念佛を称えています。けれども、朝夕は、象徴を前にして、恭しく礼拝し、その向こうに法身法身あるいは報身佛の阿弥陀如来を仰いでいるのです。

### 物質にも情有る

そこで、一切の有情——有情とは心あるもの、文字どおり情のあるもの、生きとし生けるものです。この生きとし生けるもの、みんなが情があるのです。こういうと、ミミズやアミーバなんか情がありますかと、反論が出ると思ひ

ます。しかし、われわれが人間としていつているような感情が、そのままの姿として表現されているとはいいませんが、彼らにも、はっきりした意思があり、情があるのです。いやなこと、好ましいことを選択している。したがって情があると思うほうが現実合っているのです。物質でさえも一つの構造をもつと、それが力になってあらわれる。それは遣伝子の研究ではっきり教えられています。ゆえにますます物質といえども、いわゆる単なる物質の面だけ見ていては、片手落ちなものを感じます。物質にも識があります。佛教では、人間の体は四つの元素が、仮に和合してできているといっています。その四つの元素を、当時の言葉で四大といのです。四大とは地水火風、風は空気です。これが四つの要素です。この四大が識を持っています。意識のもう一つ前の識といつてよろしいでしょう。

佛教では、識ということについて、実によく研究されています。まず第一に六識をいいます。眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識です。この六識までは、われわれが意識することができます。お互いに毎日意識の上で暮らしていることですから、よくわかりましょう。

ところが、そのように見るとか聞こえるとかいうこと

でなしに、自己本意にすべて物を決めつけ、差別する識があります。それを第七識、末那識といいます。これからが深層心理のところへ入り、われわれは、これを無意識といっています。無意識とは、われわれが意識していないというのであって、意識していないから識がないというのではありません。

さらには第八識、阿頼耶識があります。この阿頼耶識は、われわれの根源、一番底にあるところの識です。これは生きたし生けるものみな持っているのだといわれています。

この識は、縁によって善ともなるが、縁によっては悪ともなる。だから、悪人が生まれたり佛が生まれたりするのです。そして過去の記憶をここによくとどめているので識の蔵、蔵識ぞうしきとも教えています。今日の遺伝学からこの阿頼耶識の思想は非常に参考になります。

アミーバから人間に至るまで、遺伝子があつて、その遺伝子は親にそっくり似た子供をつくる。アミーバの子はいつまでもアミーバです。サルの子はいつもサルを産む。犬は犬、猫は猫、人間は人間が生まれる。そこには自然の大法則があるのである。

私は、佛法も自然の大法則と思うのです。本願を信じ念

佛をもうさば佛になるということは、信心の側からだけでいくとわかりかね、何だか疑わしく思います。だが、それ自身が自然の大法則であります。それを親鸞聖人は自然法爾という言葉であらわしてられる。また、他力というのは本願力なり、裏からいえば如来の本願力は他力であると表現なさるゆえんは、自然の大法則を直観してられるからではないでしょうか。それを直観されたのはお釈迦さまです。だから、佛法がいかに不滅の真理であり、不滅の宗教であるか、私は一点の疑いも持たないわけです。

そういうわけで、わが父わが母を葬うこと、それはわれわれの恩愛の情ですから、ある意味で、それも自然です。したがってそれをとやかくいうことはやほだと思えます。それだけでなく、この大法則によって、生きとし生けるものはみな救われるのです。ですから「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」ということが一層はつきりしたと思います。「いづれもいづれも」どれもこれも生きとし生けるものはみな、今仮にいただいているこの生を終わつたその次には、みな佛に助けられていく。それが、本願を信じ念佛もうさば佛になるという法であります。